

尾道の灯

高橋玄洋

放送日 昭和37年9月19日
番組名 虹の劇場
制作 NETテレビ
演出 有馬康彦
音楽 木下忠司
(三共製薬、花王石鹼)

登場人物
坂井勉 山本豊三
村上志都 川口敦子
坂井清人 浅野進治郎
又やす 岸輝子
又三 瀬良明
又五郎 天津浩一
高五津 青木義朗
船員 穂高稔
伊海田弘
灰地順
行友かつ江
港の女 2 三浦梨花

1 プロローグ（明け方）

鮮かな朝日が浄土寺の多宝塔に輝いている。
（急速に近づいて来る列車の汽笛）

その山門の直ぐ下を列車が白煙をあげて通ってゆく。
列車の進む方向に、未だ眠っている港と麓の連なりの街がある。

間の抜けた朝の街灯だけが起きている静寂の中に、ポンポン蒸気音だけがさえて聞えてくる。

これが尾道の町だ。

タイトルOLL

山頂に積木の様に積み上げられた住宅地。

波止場に並ぶ白壁の倉庫。

栈橋に碇泊している島通いの巡航船。

突きあたりをポンポン蒸気が通ってゆく露地。（以上でタイトル終る）

問屋街の屋根の連なり。

石段のある坂道、坂道、坂道。

アナウンス 尾道は麓と路地と石段の街である。戦災をまぬがれたこの港町には、何時に変わぬ潮の香と共に屋根裏の何処かに、未だ明治のチリがつもっていそうな匂いがある。中国路をゆく人々の旅情を誘うのである。汽車の窓から過ぎゆくこの街を眺めた旅人は、一度はこの街に降り立ち、あの屋根の一つ一つの下にある、一つ一つのささやかな夢と幸福とを自分の脚で確かめたいと思うのである。

カメラひくとテレビの画面である。

アナウンス 人口九万一千、市街はおだやかな瀬戸内海に沿って長く東西に伸び、背後は山裾に点在する寺院名刹は、その数三十有余を数えて、往時の華やかなりし面影を今に止めてはいるものの、時代の大きな波はこの静かな屋根の下をも置き去りにはしない。

喫茶店で、じっとテレビを見ている学生服の勉（二十才）。

アナウンス 東西交通の要港として発達した港も、今では四国、内海島峡部の基点と代り、備後緋、備後豊表の集散地として栄えた問屋街も船具、佃煮等の第二次産業へと変貌しつつある。

静かに扉をとぎした問屋街。

勉の声 あの人は、今頃何処にどうしているのだろうか……このなつかしい町も僕にはあのひとの想い出に肺腑をえぐられるだけだ……そうです、あの人が私の前に現われたのも一昨年の矢張り今頃でした。

O・L

2 図書館の表（回想）

木造の古い病院のような図書館の玄関をセーターの勉（十八）が露地へ出て来る。

3 街の中にある門を抜けて、国道をゆく勉——行く手に山の住宅地。

勉の声 東京の大学受験に失敗した私は、他にすることのある筈もなく、毎日図書館へ通ってはいたものの、友人の何人かが、あの東京の街を角帽姿で歩いていると思うだけで、勉強に身の入るわけもなく……。

4 問屋街

勉、やって来て、その一軒に入る――
勉の声 ……母の「可哀想に」の言葉を避けて、店の二階に浪人の身を、すねた様に寝起
きしていました。

5 店の中

薄暗い土間は美事に片付けられて、数本の畳表と花筵むしろうの見本が天窗の光に浮いて
みえる。
手織りの機械。
格子の向うの帳場に父の清人（五十）と志都しづ（二十一）、志都の伯父又三（五十八）
が坐っているのが、矢張り天窗の明りとスタンドの光りで浮き出して見えている。
勉、潜り戸を開けて入って来る。

奥で声 お帰んなさい。

勉、黙って中土間の格子戸を開け、帳場とは反対側の階段を二階へ上りかける。

清人 やつとるんか、勉強は？

勉 ……。

勉、そのまま上ってゆく。

清人 困ったもんだよ、あれも……。

又三 しかし旦那、お坊っちゃんちゃんの試験は来年も有りやんすがな。

清人 そう云うたってな……、のう、又三さん、そりや、志都さんのおとつあんがあ
んな死に方をしたのは、ウチの故もあるかも知れん。わしも責任はよう感じとる。それ
に、わしはこの人の仲人もさせて貰った。その責任もよう感じとる。しかし、この丸金
がこの態たらくだ、どうしてあげようにも、どうにも出来んのだよ。

又三 判ってますで、わしはそんな恨みごとの一つも云いに来たんじやないんですけえ
……。唯、志都も親爺おやじに死なれて行き場が無いもんだで……。戻ってなど来るけに……。

6 店の二階

勉、風呂敷包みをほどいて本を出す、そのままごろんと寝る。

清人の声 佃煮を始めりや、人手はいくらあっても足りん位いじやが、それも夏を越して
の話だしな……高津へ戻る気は全然ないのかい。

志都の声 ……。

又三の声 わしもそりや随分云うたんじやけんど……。

清人の声 船乗りや、気も荒いが、それだけさっぱりもしとるんじや、少々の酒ぐせ位い
は大目に見てやらんと、板子一枚地獄の底じやからな、船乗りは……。

志都の声 嫌です！ あんな人……。

勉、その声に初めて階段の方を気にする。

7 石段の道を登ってゆく勉

勉の声 この街では少い平地を有効に使うため、店とは別に山の手に本宅と称する住いを

持っている家が多く、私の家も千光寺山の中腹にありました。

勉、その一軒の門へ入ってゆく。

O・L

8 廊下

勉、奥の部屋へ行きかける。

やすの声 勉かい？

勉 うん。

やすの声 一寸いらつしやい。

勉、明り障子を開けて入る。

9 居間

清人と母のやす（四十五）、坐している。

勉 なあに？

やす 会ったことあるかなあ、あんた、……桃島の又五郎さん？

勉 知らん。（と、茶箆筒を開ける）

やす 何ですよ、大きななりして……。

清人 今度、家の手伝いをして貰うことになった志都さんだ。

勉 フン。

清人 お手伝いと云つても、家族と同じだから仲良くやんなさい。

勉 家は倒れそうなんじゃないの？

清人 馬鹿、そんなことお前が心配せんでもええ……畳表を佃煮に切りかえるだけだ。
やす 志都さんのお父さんは、花筵を織る名人だった人なんだよ。

勉 そう、……御飯早くしてね。

勉、廊下へ出てゆくと、小さな中庭をへだてた中二階の勉強部屋へ行く。

清人 （見送って）一人っ子で、これが甘やかすもんだから……。

やす 大学に落ちてイライラしてるんですよ。予備校へも行けないし。

清人 自分が入れなかったからって、人に当ることはない。

やす 別に当ってるわけじゃありませんよ。あの子にしてみれば……。

志都 何処を受けなされたのです？

清人 早稲田の文学部、……問屋をやるのに文学でもあるまいけど、……一応は好きな

ことをやらせとかと、……仲々腰がすわらんもんでな、……商売に、高い廻り道でさ。

やす 店がこんなことになって、父さん、受からなくてほっとしてなさるのよ。

清人 そんなことあるものか、しかし来年落ちたら、店を手伝わすんだな。

やす そうだ。志都さんに勉の世話をみて貰やんしょうか、家のことは大体私で間に合

うんだし、……あの子にも何を考えてるのか、ほとほと困って了うのよ。

志都 私にはとても……。

やす 洗濯物出せと云つても、一寸も出さないし、運動不足になるから云うてもお店の

二階へとじこもりつきりでしょ。

清人 とじこもりつきりでもなさそうだぞ。

やす 図書館に通ってるンでしょ。

清人 何処の図書館か判るもんか。
やす そうですよ。……お友達は、入った人も落ちた人も殆んど東京へ行って誰もいな
さらんし。(志都に) お店に人手が無くなってからは、朝晩の弁当だけでもそりゃ一仕
事なんよ。

志都 (うなずいて聞いている) そんな事でしたら。

10 同 勉強部屋

勉、本箱から本を取り出すと窓に腰かけて開く。

ヌードの写真が出て来る。

口笛を吹く勉。

11 店の中

(リーダーを読む声が聞えてくる)

お弁当を持った志都が潜り戸を開けて入ってくる。

(リーダーを読む声、ぴたりと止る)

志都、二階へ上ってゆく。

12 同 二階

リーダーを顔に載せて狸寝入りをきめこんでいる勉。

志都、上って来て……。

志都 まあまあ。

丹前をかけて降りてゆく。

勉 そつと眼を開ける。

13 同 店の土間

志都、降りて来ると、所在なさそうに手織機に坐つて藺草いぐさをとり、なぐさみに編み
始める。

カタンカタン、とその音は空ろな店にひびく。

勉、下りて来る。

志都 あ、お早うございます。

勉 止めてくれないかな、寝られないから……。

志都 英語が読めないからでしょ。

……。

志都 蒲団上げますか。

勉 (あわてて) いいよ、いいよ。……これから寝るんだ。

志都 まあ、フクローみたい……。夜起きて、昼寝て……じゃ、おみおつけ温めますね。

勉 いいよ、後で食べるから……。

志都 お昼はお昼で運びます。

勉 いいったら、いいんだよ。

志都 でも、……体に悪いわ。

勉 放つといってくれよ。
勉、二階へ戻りかける。
志都 暴君ね、あんたも……。
……。
勉、そのまま二階へ去る。

14 同 二階

勉、上ってくる今度は蒲団へもぐり込む。
志都も上ってくる。
志都 じゃ、洗濯物だけ出しといて下さい。……あつ、これね。
勉 いいったら！
志都 いいことなかりゃん、汗くさい。
勉 止せたら！
志都 だって、お母さまが……。
勉 止せというのにつ！
志都 いいえ。
引っ張りあってシャツが破れる。
志都 あつ。
勉 それみろ、だから……。！
志都 あなたがいけないのよ、引っ張るから……。

勉 ……。
志都 勿体ぶることないでしょ、そんなに……。
勉 何時俺が勿体ぶった！
志都 大学に入れなかった位いなによ。
勉 何だどつ！もう一度云ってみろ！
志都 じゃ、下着の洗濯ぐらいさせてくれたっていいじゃない、私の仕事なんだもの。
勉 君の仕事なんか、初めっから……。
志都 無いつて云うの、この家には……。いいわ、もう何んにもして上げないから。
志都、汚れものを置くと降りてゆく。
勉も蒲団をかぶってしまふ。
勉の声 ……ただ照れくさかったただけだ。母以外、女気の全くない家に育った私には、若い女が同じ家の中にいるというだけでまばゆかったのです。

15 同 店の土間

志都、降りて来、上りがまちに坐るが、無意識に手織機の処へ行くと荒々しく編み始める。
その手が次第ににぶってくる。
勉の声 しかし、いくら私と喧嘩しても、志都さんには帰る家がなかったのだ。
手を止めて、じっとしていた志都、立ち上る。

16 同 二階

勉、蒲団から顔だけ出しているが——そつと志都が上ってくる気配に目をとじる。

志都 ……先刻は、すみませんでした。

勉 ……。

志都 ……お休みなさいませ。

勉 ……。

志都、汚れものを膝におくと静かに立って行く。

勉 (目を閉じたまま) 機はたおつてもいいよ。

志都 ハイ。

志都、そのまま降りてゆく。

(暫くして機の音、聞えてくる)

勉、蒲団を抜け出して裏の窓から屋根の天窓へ身を乗り出して覗こうとするが暗くて見えない。

17 同 店の土間

機を織る志都の手元に天窓の蔭がさす。(機の音がポンポン船の音にだぶつて)

O・L

18 尾道水道をゆく渡し船

勉の声 その日から私の心に再び明るさと張りが戻って来たようでした。志都さんの運ん

でくれた朝昼の食事が待たれてならない。一方、店の二階に逃げて来たことが悔やまれてならないのです。

O・L

19 店の二階

勉の声 ……こんな気持が、志都さんに通じるはずもありませんでした。

志都の給仕で勉が食事をしている。

志都 むずかしいんでしょう？(と、近くの本を手にとって) 私は頭が悪いから、中学の時もいつも真ん中辺をブラブラしていたわ。

勉 女は中どころが一番いいよ。

志都 あら、何故？

勉 僕達のクラスでも、成績のいい奴はガリ勉で頭ずが高くて、意地っ帳りで、……第一、頭のよすぎる女は嫁のもらい手がないさ。

志都 まあ、生意気云って。

勉 生意気なもんか、本当だよ。

志都 じゃ中どころは？

勉 概して、気立てがいいよ。

志都 そんな、ガールフレンドがいたのね。

勉 いるもんか、そんなもの。

志都 いたいた。ちゃんと顔に書いてある。

勉 いるもんか、誰に聞いたっていいよ。本当なんだから……。

志都 いいわ、そんなにムキにならなかつたって。面白いのね、勉強して時々急にムキになつて。

勉 (黙々と食べる)

志都 お勉強も大事でしょうけど、少しは外の空気に当らなきゃ。

勉 当ってるよ、毎晩。(云つて口をつぐむ)

志都 あら、晩はダメよ、昼のお日様でなきゃ……何だか、眼が血走ってるみたい。

勉 徹夜するからさ。(茶碗を見て)……志都さんの瞳はきれいだね。

志都 (吹き出して) 私の目、瞳だなんて云われたの生れて初めてだわ。(笑いが止まらない)

勉 (つられて苦笑する)

志都 ごめんなさい……綺麗だとしたら、きつとよく寝るからよ。

勉 でも、案外遅いじゃないか、寝るの……。

志都 あら、ここから見えるの？

勉 うん、まあね。

志都 小父さまに、算盤習ってるの、毎晩。佃煮工場が始まったら会計に使つて下さるんですつて。

勉 工場なんか出なかつたって、ずっと家にいればいいのに。

志都 そうはいかないわ。来年は勉強さんも東京だし……お家にそんなに仕事ないもの。

勉 それ位のことしたつていいんだよ、親爺は……。

志都 どうして？

勉 だつて又五郎さんが死んだんだけ、うちが失敗したのが……。

志都 父は時勢について行けなかつたんだわ。花菱を織ることしか出来ないんですか
ら……藺草田も持たないで機だけで暮せる時代じゃないんですもの。

勉 志都さんは、お父さんが亡くなった時、家を恨まなかつた？

志都 ……それは、あの時は……こちらの事情も知らなかつたし、……でも、人を恨んだりするのは嫌いな方だから……。

勉 そんならいいんだけど……志都さんが初めて来た時、復讐に来たんだと思つた。

志都 まあ、そんな恐い顔してた？

勉 復讐の夜又……。

志都 じゃ復讐しようかしら……怖いわよ。(二人、顔を見合せて笑う)

志都 さ、早く帰らなきゃ、お勉強の邪魔ね。(帰る用意をする)

勉 いいよ、もう少し。

志都 小母さんに叱られちゃう、……何か持つて来るものは？

勉 御飯！

志都 お菓子！

勉 お小遣い！

志都 それは駄目ッ！……お母さんおっしゃつたわ、渡すと映画観に行くんだからつて……。

勉 世情にうといからな、お袋は。国際情勢の推移を知らない……あッ、本箱の歴史辞典持つて来て貰おうかな。

志都 歴史辞典ね、ハイ。

志都、降りてゆく。

勉 ようしッ!

両の手を挙げて伸びをすると、机に向って鉢巻きをしめる。

勉の声 私は、志都さんとの時間を少しでも満ち足りた気持ちで過すために勉強にはげんだ。

英単語を暗記する勉。

20 帰ってゆく志都

勉の声 志都さんも一時の捨てばちな処がなくなり随分明るくなった。結婚に失敗し、帰る家さえ失った志都さんも、どうやら安住の巣を見つけたようだった。

21 店の二階

勉強していた勉。

勉 (突然) あッ、いけね!

あわてて立ち上る。

22 本宅の居間

やすと志都が湯のしをしている。

やす あんたに来て貰うて、本当によかった。

志都 そんなことありませんわ。勉さん、勉強家ですもの。

やす あの子は、小さい時から神経質でね。今度の試験に落ちた時だって、一時はどうなることかと思ったンよ、何を作ってやっても一寸も食べてくれンし……。

志都 私の顔は、きつと食欲をそそるんですわ。

やす 大学って処は、あんなにしなきゃ入れないンかと思うと可哀そうでねえ。

志都 (うなずいて) 来年は大丈夫ですわ。……あれで通らなければウソです……でも、少しは運動しないと……。

やす そうなンよ。

志都 ……あれじゃ、養鶏場の鶏みたい。動かさないと食べるばかり……。

やす おまけに朝晩電気のつけっ放しで。

志都 今に脂が乗ってぶくぶくになっちゃう。(玄関に音がする)

やす 誰だろ。

勉の声 只今。

やす まあ珍らしい、ぶくぶく鶏よ。

23 廊下

勉、足早にやって来て勉強部屋へ。

やす どうしたの勉ン、一寸。

やすと志都、顔を見合わせる。

やす じゃ、お茶でも入れましょうか。

24 勉強部屋

勉、本箱を開けて、しきりに探す。

二、三冊、本を振ってみるが出て来ないのであわてる。

志都、やって来る。

志都 何ですか？

勉 いや、……歴史辞典は？

志都 フフ、これでしょ？ 探しのもの……（ヌード写真を出し）大事なものは、もっと大切にしまつとかなきゃあ……。

勉、ひったくると、やにわに破つて了う。

志都 まあまあ。

勉 母さんは？

志都 （ニコニコと首をふって）勉さんも、子供じゃないのね。

勉 当り前さ、……さあ、早くあっちへ行ってくれよ。（やたらに顔をふきながら）探しものがあるんだから……。

志都 まだ持つてるの。

勉 ある……もんか。（捨て場所もなくポケットにつっこむ）

志都 それご覧なさい。息が切れるでしょう、運動しないからよ……明日から散歩に連れ出して上げる。鎖つけて……。

勉 えらそうに、……犬じゃないよ。

志都 だって、鎖でもつけなきゃ危険なもの……狂犬病は……。

勉 馬鹿、馬鹿、（もう一度振返って）馬鹿。

勉、走る様に帰ってゆく。

25 廊下―居間

やす、出て来て、

やす まあ、何て子でしょう。

志都 一寸の時間もおしインですわ、今の勉さんは……。

やす あの子のすることはさっぱり判りゃんせん。仕様のない……さ、私達で頂きやんしょう。

志都も戻って来て坐る。

志都 （改まって）小母さん……お邪魔でなかったら、ずっとここに置いて下さい。

やす まあ、急に改まって……。

志都 どんなことでも致します。ですから……。

やす ええええ、そりやあもう、あんたさえよければ……お父さんとも言つとるんよ、もう一度この家からお嫁に行つて貰おうつて。

志都 いいえ、もう結婚なんか、高津一人でたくさんです。

やす なにを、まだ若いのに……その上で、あんたの里帰りする家は、この家なんよ。

志都 このままでいいんです、一生……。

やす そりやいきやんせん。女は矢つ張り……でも、どうして又急に……。

志都 こんなによくして頂くの、生れて初めてなんです。……母の顔も覚えていません

し、父もあんな人でしたから、やさしくして貰った覚えは一度もありません。御飯を炊くのを覚えたのは六ツの時、機を織るのを覚えたのは、八ツの時でした。学校にも減多にやって貰えず、納屋の隅で、来る日も、来る日も……。

O・L

26 回想

小さな手が機を織ってゆく。八ツの志都である。

又五郎がやって来て、出来具合を調べ、志都の頭を小突いて小言を云う。

志都、涙をぬぐって織り続ける。

又五郎、いらいらして又手直しして小突く。

志都たまりかねて泣き出す。

又五郎、拳骨を振り上げる。

志都、おびえて立てかけた藺草の上に逃げる。

又五郎あわてて、志都を放り出し、藺草の折れ具合を調べる。

泣き続ける志都。

O・L

27 居間

聞いているやすも泣いている。

勉の声 志都さんは、だから十八でお嫁に行く時は、どんなに嬉しかったか知れないと云ったそうです。その結婚が二度と嫌だと云うのですから、その生活も大体の想像はつこうと云うもの……後で母からこの話を聞いた私は、何としても志都さんを倅せにしてみ

せると堅く心に誓いました。

28 廊下

志都が廊下に出て来てハンカチを渡す。

(貨物船の汽笛) 志都、港を見て、ハツとする。

港に入っている貨物船。

志都、目眩まいを感じて柱にくず折れる。

29 店の中

(帳場の電話が鳴っている) 勉、二階から降りて来る。

勉 もしもし。(野卑な流行歌と女の嬌声が聞えて来る)

勉 もしもし。(切ろうとする)

声 ……ああ、丸金さんかね。

勉 ええ、そうですか。

声 あんたン処に、志都って女居るだろう、ちよつと出して貰いたいンだがね。

勉 ここには居ませんが。

女の声 よしんさいよ、逃げてった女なんか。

勉 貴方は誰ですか。

声 志都の亭主だがね……。

勉 ……じゃ、高津……さん。

30 小さなスタンドバー

同僚の船員と女達が高津の電話を覗き込んでいる。

高津 そうよ、その高津さんよ……。そう云うお前さんは誰だい？

勉の声 家の者ですが……。

高津 志都には何処へ行ったら会えるンだい。

勉の声 志都さんは、はっきり別れたはずですが。

高津 何だど?! もう一度云ってみろ!

船員1 そうそう、その調子!

高津 それとも、こっちから出向いて頂きたいとおっしゃるのかね。

女1 あら、テイネイな言葉も知ってるよ、この人。

高津 一々五月蠅いッ! 少しは隅の方へひっ込んでろッ。

勉の声 もしもし、もしもし。

高津 もしもしは、もう判ったよ。

勉の声 そこは何処なンです。

高津 ここか? ここは、中浜のな、(女に) 教えてやんな。

女2 (奇妙な声で) あッ、もしもし私、明子。

一同 (笑う)

31 店の中

勉 ……じゃ、帰ったら直ぐ行かせます。

32 バー

女2 直ぐ行かせるってさ。

船員1 そう来なくっちゃあ。

高津 (取って) 来なきや、こっちから出向かせて貰うぜ。お前ン処の灯が窓の向うで

招いてるからな。帰ったら云ってやんな、お家の方々には俺だって、御迷惑かけたくな

えッて云ってたってな。(切る)

33 店の中

勉、電話を切ると、もう一度ダイヤルを廻そうとするが、それも止めて立ち上ると、

下駄を突っかけて出てゆく。

O・L

34 バー

船員1 俺は来る方に賭けるぜ。

女1 私は来ない方。

船員2 兄貴にや悪いが来ないよ。

女2 来る、絶対来る。

船員3 二人来るよ、女と、現在の男と……。

高津 何だど?! 現在の男……フン、聞いてりや、人の女を遊びに使いやがって、……

俺は真剣なんだ！ 草の根わけても探し出すんだ！ 俺達は伊達や酔狂で船に乗ってんじゃねえぞ。

船員1 そうだとも……。

高津 てめえ、太平洋の真中でよ、てめえの女房が、他の男と一緒にの夢を見たことねえか、……どっちを向いても水平線さ、何を叩いてもひっ込む様なものは一つとして残っちゃいねえ。

船員1、空缶を拳骨でカウンターの上面につぶす。

高津 その中で、毎晩々々、同じ夢を見さされるんだ、……クソツ！

船員2 兄貴、それを云っちゃいけねえ、……そいつを云っちゃいけねえ、……船乗りの男がすたるじゃねえか。

(女が唄い出すのに和して一同唄い出す)

〱板子一枚地獄の底さ、明日の命を誰が知る……。

勉、扉をそっと開けて入って来る。

一同しんとして入口を見る。

船員2 兄貴、来たぜ。

高津、やおら振り向く。

勉 ……高津さんは……？

高津 お前さん一人かい。

勉 (うなづく)

女1 もうらったツ！ (カウンターの上の金を集める)

勉 そうです。話がしたいンだけど……。

船員1、2、3、やおら立ち上っている。

高津 いいや、お前さんなら話はねえや……。

勉、黙って立っている。

高津 志都は、相変らず月に一辺ヒステリーツて奴起してるかね。

勉 (キツとなる)

船員1 兄ちゃん、話は静かにつけようぜ。

勉の肩を抱くようにして船員1、2、3出て行く。高津一人残る。

高津 酒ッ！ (カウンターにうつ伏す)

35 波

波止場の石段に小波が静かに寄せて、外灯の灯がゆれている。

O・L

36 店の二階

朝になって傷ついた勉が蒲団に寝ている。

志都、洗面器を持って上って来る。

志都 ね、本宅へ帰りましょう。

勉 少し、静かに歩いてくれよ。

志都 いい罰当りよ、未成年のくせにお酒なんか飲むから……さ、手を出しなさい。拭いて上げる。

勉 (手を出し) い、痛たたた……。

志都 折角、規則正しくお勉強してると思ったら……。 (と手を拭く)

勉 凄いやつだね、志都さんの手。

志都 長い間、機を織った手はみんなやつが出来るのよ。

勉 さわっていい？

志都 ……。 いけませんッ。人が心配して上げてるのに、何処で転んだの？

勉 中浜の倉庫の前……。

志都 これだけ転ぶ位い酔ってて、よく覚えてるのね。

勉 (手の平にさわって) ワア、ゴツゴツだ。

志都 誤魔化さないで。

勉、手拭いをとって、口を拭く。

志都 口の中も切ってるのね。

勉 ……。

志都 いくら石畳だって、転んだ位いで口の中まで切るかしら……。

勉 ……。

志都 勉強ちゃん、何か隠してるわネ。

勉 ……。

(貨物船の汽笛が鳴る)

志都、おびえるように身をひく。

勉 大丈夫だよ、……出航するんだ。

志都 矢張り、そうだったのね。

勉 もう大丈夫さ、話をついたんだから……。

志都 …… (見る見る涙がこみ上げて来たかと思うと両の手で勉の顔を包むようにして)

馬鹿、馬鹿、……勉強ちゃんの大馬鹿ッ。(接吻し体全体をゆすぶって慟哭する)

勉 昨夜、電話が掛って来たんだ。

志都 ……。

勉 高津って人に会ったよ。でも殴ったのは、あの人じゃないよ。

志都、たまりかねて駆け降りる。

勉 志都さん……。

体を起そうとするが痛くて起きられない。

37 店の土間

志都、駆け降りて来ると土間にうずくまって泣く。

勉の声 この怪我のお蔭で、私は、願ってもない本宅へ帰ることになりましたが、その後、

暫く志都さんは私の前に姿を現わさず、たまに、余儀ないことで私の部屋に来てても変に

他人行儀で余所々々しく、話掛けることもはばかられる始末でした。

38 本宅の勉強部屋

枕辺でアンダーラインが引かれる参考書。

澄ました顔の志都が入って来る。

志都 お茶を持って来ました。
勉 何をそんなに怒ってるの、志都さん。
志都 怒ってなんかいません。
勉 そんなら、もう少し以前のよう打ちとけてくれたっていいじゃないの。
志都 ハイ、でも、私はいけない女ですから……。
勉 誰がそんなこと云ったの？ ね、誰が……志都さんが何時いけないことを……。
志都 小母さまがいらつしやいます。
やすが廊下を渡ってやって来る。
やす 勉、……あんた達、いつまで、そんなにいがみ合ってるの？ 何で喧嘩したのか
知らないけど、男はあっさりしなきゃ。
勉 あっさりしないのは志都さんの方だよ。
やす もう朝晩は涼しくなったんだから二人で散歩して来たら？
勉 うん、行こうか。
志都 ……。
やす じゃ、志都さん、帰りに晩の買物済まして来て頂戴。
志都 ……。

39 土塀の道（浄土寺道）

セーターの勉と買物籠をさげた志都が行く。

40 浄土寺境内

二人、山門に入って来てハトに豆をやり、金堂の縁に坐る。
山門脇でお百度を踏む女。

41 坐った二人

二人、お百度を踏む女を見ている。

勉 あの女、何の願を掛けているのかな。

志都 きっと誰か病気なのね、それとも……息子さんが試験を受けるのかしら……。

勉 試験は願かけたって通るもんか。

志都 そう云って了ったら何でもそうだわ。

(間)

勉 久しぶりだね、志都さんと二人……。

志都 あっ、造船所のクレーンが動いてる。

勉 どうして、話をはぐらかすの？

志都 ……私は、いけない女です。

勉 ……同じことばかり……いけない女って、あの人のこと？

志都 ……。

勉 接吻したこと？

志都 ……。

勉 黙ってちゃ、一寸も判らない……志都さんは怒ると直ぐ黙って了うんだからな。

志都 ……だからいけない女なんです。

勉 (いらいらして) 志都さんは、黙ってりやそれで気が済むだろうけど、僕は落着いて勉強も出来ないんだ。もう五ヶ月しかないって云うのに……。

志都 (ハツとして勉を見る)

勉 僕の気持……判ってるくせに……。

志都 ……いけないわ、そんな……。

勉 仕方ないさ、好きなんでもン!

志都 (涙を耐えて) ……勉ちゃんには、まだ判らないのよ、私がどんなにいけない……。

勉 (取って) あ、そうだよ、僕はまだ子供だよ、浪人だよ。……父さんも母さんも、

二言目には大学へ入ったら、大学へ入ったらだ。でも、大学へ入ろうと入るまいと、十九は十九なんだ。僕だって、店を手伝えば一人前にやれるんだ。

志都 違うのよ、そんなことじゃないわ。……でも、私は結婚までした女よ。

勉 それが何さ。……ちゃんと別れたんじゃないか。

志都 ……別れたって、同じよ。

勉 じゃ、一度結婚に失敗した人は、二度と俵せになっちゃいけないと云うの?

志都 もう何もおっしやらないで。

勉 云うさ。……そんなことってあるものか。僕が志都さんを俵せにしたいのが何故いけないんだ。……今までが不俵せなら、その分まで取り戻そうと思うのが当りまえじゃないか。……それとも、僕が年下で、まだ大学が四年もあるから、待てないって云う

の?

志都 そんな……。

勉 四年先だって、志都さんまだ二十七じゃないか。それに、年上の人と結婚していけないって法はない筈だよ。

志都 それはそうだけど……。

勉 それとも、もう僕のこと嫌いになったの? そんならそうと……。

志都 ……ひどいわ(涙声になって) そんなら、こんなに苦しみはしません。……勉ちゃんもお勉強に手がつかなかったかも知れないけど、私だって、……私だって、こんなに、夜も眠られないほど……。

勉 じゃ、云うことないじゃないか。……何んなら大学はやめたっていいんだ。

志都 駄目よ、そんなこと! 学校だけは行かなきゃあ。

勉 こんな気持じゃ、どうせ落ちるに決ってるさ。

志都、ただ泣いている。

(ポンポン蒸気の音が静かに聞えて来る)

志都 (ようやく顔を上げて決心した様に) ……勉ちゃんにお委せするわ。

勉 えっ、いいんだねッ!

志都 (うなづく)

勉 ……今まで通り笑ってつき合ってくれるんだね。

志都 (はつきりうなづく) でも、お勉強だけはしてね、でないと……お母様たちが……。

勉 うん……親爺やお袋だって、あんなに志都さんのこと気に入ってるんだもの、きつと許してくれるよ。

志 都 でも、云っちゃ駄目よ、お父さま達に……。

勉 何故？

志 都 ……試験が済んでから……ね、お願い。

勉 ……どうしてもと云うのなら、そうするけど。

志 都 今云うと、勉ちゃん不良と間違われるわ。

勉 そうだね……大学へ入れたら云うよ。

志 都 (笑ってうなずき) ……勉ちゃん、案外弱虫なのね。(泣きじやくりが出る)

二人、何んとなく笑う。

志 都 ……大学に入れたら、嬉しいでしょうね。

勉 そりゃ……でも今日ほどじゃないよ、きつと。

志 都 何時そんなお世辞を覚えたの？……私、お祝いに何をあげようかしら……。

勉 この間の様な……。

志 都 ……お馬鹿さんね、……だけどそれまでは駄目よ、お勉強の邪魔だから……。

勉 (うなずいて立ち上り) ……さあ、やるぞッ！

勉、前へ出て来る。

目頭をおさえてじつと見守る志都。

42 西国寺

その山門(大わらじ)と石段。

本堂前——志都が支社を廻り祈願している。

O・L

43 勉強部屋

日課表の前で勉強する勉。

44 居間

清人に算盤を習っている志都。

O・L

45 西国寺

お百度石。

石段を上り降りしてお百度を踏む志都。

O・L

46 勉強部屋

勉強する勉。

47 居間

算盤を入れる志都、ぼんやり考え込む。

清人 どうした？

志 都 (ハツとして) ハ、ハイ。(御破算する)

清人 近頃は、どうかしてるな、ぼんやりして……。
やす そうよ、御使いに行っても、帰りが遅いし……どうしたの？
志都 済みません……お願いします。

48 西国寺

懸命にお百度をふむ志都。
Wって――

49 日課表一月から二月になる

50 勉強部屋

その日課表の下、机の前にうたたねする勉。
障子がそつと開いて志都が顔を出し、落ちている丹前を掛けてやる。
勉、目を開ける。

志都 風邪ひくわ。

勉 (背伸びして) さあ、到頭やって来た。

日課表の最後に○をつける。

志都 よくやったわネ……一年間……。

勉 母さんは？

志都 板橋の小母さんて方に持ってって貰うんだってカマボコを取りにいらしたわ。

勉 今夜は、汽車の中か……ここまで来れば、後は運を天に委せるだけだな。

志都 そうよ、……でも大丈夫、今年はきつと通るわ。あんなにやったんですもの。……神様だって、仏さまだって……。

勉 ……褒美をくれてもいい位いさ。

志都 ……本当に。

勉 凄くつらいこともあったけど(と、志都の手を取り) この志都さんのタコのこと
思うと、どんな苦しいことも我慢出来たんだ。僕が入学出来たらこのタコのおかげだよ。

志都 じゃ、お祝いには、このタコにシメナワでも張ってやりましょう。

志都、笑おうとして涙になるのをこらえる。

勉 ……志都さん、今度帰ったらね。(手を強く握る)

志都 ……私だって、……勉ちゃんのお勉強のお蔭で簿記と算盤覚えられたわ。

勉 でも、あんまり、佃煮臭くならないでね。

志都 まあ……。

勉 去年の港まつりは、泣きの涙だったけど、今年は工場も出来るし、志都さんも居るし、楽しい港まつりになりそうだな。

志都 今年も、小倉の祇園太鼓も来るンですって。

勉 一緒に見に行こう。……昼御飯食べたら、久しぶりに散歩しようよ。

志都 (うなずく)

志都、小さな半紙の包を出し、

志都 これ、連れてって下さいね。

勉 何？（開けてみる）

中から、可愛いわらじが出てくる。

勉 随分可愛いーんだなあ。

志都 旅をする時のおまじない。昔からこれを持つてると、脚が疲れないんですって……。

勉 ……志都さんが作ってくれたの？

志都 （うなづく）

勉 有難う、志都さん……。

志都 志都と呼んで下さい。

勉 志都さんが「勉ちゃん」を止めてくれたらね。どうしたの、今日の志都さん変だなあ、体なんか震わして。

勉 志都の肩に手をかける。

勉 こんなに震えてる、……（何か急に込み上げて来るものがある）志都さんッ！

勉 勉、力一杯抱きしめる。

志都 （うわ言の様に）……御褒美よ、……私の御褒美よ。

勉 志都さん！

O・L

51 製山の山稜を行く二人

勉の声 あの時、志都さんの態度に気付いていれば……。試験のことで頭が一杯だったのか、志都さんの決心を見抜くことが出来なかつたうかつさが、今も深く悔まれてなりま

せん。あの日の散歩が志都さんとの最後になってしまいました。

（遠く汽車の汽笛）

O・L

52 本宅 居間

やすが伊達火鉢に灰文字を書いている。

清人 清人は一人晩酌をかたむけ、志都は針をさしている。

清人 なあに、大丈夫さ。

やす そうですよ、……あれほど勉強したんですもの。私は落ちたって決して怒ったりしやしませんよ。

清人 誰が怒るなんて云うとる。……馬鹿なことを云うな。……いや、今年は家はツイとるんじゃない、工場の方だって順調にいつとる。つぶれかけた時には、あれ程頼んでも出しよらなんだ銀行が、今度は向うからやって来よる。それに、志都の縁談だって……。

やす そう、あれ早いとこ返事しなきゃね、松尾さんだって……。

志都 ……。

清人 どうなんだい、志都は……。

志都 もう高津とのことで……。

清人 高津と松尾とは違うさ、……それに、ゆくゆくはわしの番頭をやらす男だ。今度はわしが保証する。

志都 有難い話なんですけど……。

やす まだ若いんじゃないやけえ、せくこともないけど、再婚で子供が無い話なんぞ滅多にな

いことだけんね。

志都 ハイ。

(玄関の開く音)

声 電報! ……村上志都さんに電報です。

一同、顔を見合す。

志都 ハ、ハイ。(出てゆく)

やす 志都さんにじゃ、違うわね。

志都の声 どうもお世話さまでした。

志都、廊下へ現れて、障子の明りで読む。

志都 お母さま!

飛び込んで、

志都 勉強ちゃん、合格です……合格なさったんです。

(清人に差し出す)

やす まあ、ほんま??

清人 それ見い、だから云わんこっちゃないンじゃ。(電報を読む) ダイーシボウニゴ
ウカクワラジニカンシヤスアスカエル……何じゃこりやあ。

やす まあ、志都さんに打って来るなんてねえ、あの子ったら……人の気も知らんと。

清人 なに、この一年、志都が一番面倒みて来たンじゃ、考えてみりや当り前じゃ。

やす そうよねえ、そうよねえ……ほんまにようやってくれたもんねえ。

志都 ……お母様。(泣いている)

清人 だが、このワラジちゅうのはなんじゃろう。電報局の間違いじゃないかのう。
やす 勉強のことが、お父さんに判るもんですか。かしてみなしやあ。

清人 とに角、松尾に電話して鯛をとどけさせよう、生きのええ鯛を……。

その声を後に、志都、つかれたように廊下へ出て勉強部屋へ行く。

53 勉強部屋

志都、呆然と勉強の座蒲団の前に坐る。その頬を大粒の涙がったう。

54 置手紙

志都の声 ……さようなら、志都は矢張りいけない女でございます。一度結婚した女がどんなによごれたことを考えるか、貴方にもいつかお判りになると存じます。……志都には帰る家がございます……だから、誰にも好かれなきやならなかつたのでございます。貴方が私をおしたい下さいましたのも、志都がそう仕向けたからでございます。

(勉強の「ウソだ、ウソだ」の声だぶる)

初めて、お家へ伺いました時、貴方だけが冷たい目で御覧になりました。私は何とかして、お父さまやお母さまと同じように、貴方にも好かれたかったのでございます。ただそれだけでございます。……どうか、志都のことなど無かつたことと、お忘れ下さいまして、御勉強下さいませます様、お願い申し上げます。

勉の声 その後、たち寄りそんな処へは八方手をつくし、父の反対を押し切って、新聞広告も出してみましたものの、何一つ音沙汰なく、志都さんの喜ぶさまだけを想いえがいて帰って来た私には、再び上京する気力もうせ、さりとて、想い出多き尾道に居ることは尚つらくして、港まつりに湧く四月二日、重く色あせた大学へのあこがれを背負って、ついに上京することになりました。

56 居間

トランクとボストンバッグの間に、寝転んでいる勉。(花火の音)

やす、入って来る。

やす もう忘れ物なかったね。

勉 ……うん。

やす 元氣を出しておくれよ、それじゃ、送り出した後、母さんだって心配じゃないか。

勉 (元氣なく) 大丈夫だよ、もう……。

やす 少し早目に出なきやね、ぼつぼつ見送りもある様だから……先刻も同級生だって女の子から汽車の時間聞いて来たよ。

勉 そう。

57 バー

志都と女1がカウンターをはさんでいる。

女 1 もう一度電話してみて上げようか。今度は息子さん出して下さいって云ってさ。

志都 (うつろに首を振って) いいわ。

女 1 判らないねえ、アタイならどんなにしたって噛りついて離れないけどな……。

志都 そんなんじゃないのよ。

女 1 ここだって高津さんが戻って来るまでにや、どっかかわらなきやならないんだろ？

志津 ……。私、祇園太鼓見て来るわ……いいでしょ……。一寸の間……。

女 1 何さ、水臭い。はつきり送りに行くって云ったらどうなの。

志都 ずっと背中をどやしつける。

志都 ううん、駅には行かない。

志都 出てゆく。

女 1 (髪をかきむしって) あああ、因果だねえ。(ニヤリとして受話器を取る) もしもし丸金の本宅さんですか……あつ、あんた息子さんつ、勉って子ね、……志都ちゃん、今、祇園太鼓見てるよ、本通りの……。

58 居間

勉、駆け込んで来る。

勉 母さん、荷物、済まないけど直接駅へ運んどいてッ！ 僕、一寸寄るところ忘れてた！

云いざま飛び出して行く。

呆氣にとられるやす。

59 港まつり

港の満艦飾の船、船、船。

60 石段の坂道を駈け下りる勉

(遠くブラスバンドに交って祇園太鼓が聞えて来る)

61 本通りへ抜ける露地

突き当りは見物が背中を見せている露地を駈けてゆく勉。

62 二階から見た本通りの雑踏

中央を仮装行列が通る中を勉がもまれながら駈け抜けていく。
(太鼓の響き、次第に近くなる)

63 祇園太鼓

血眼になって探して歩く勉。

太鼓。

顔、顔、顔。

太鼓、最高調になる。

人垣の後から見ていた志都、ハツとして逃げる。

64 露地

志都、駈け込んで来ると、そこにしやがみ込んで了う。

65 祇園太鼓

時計を気にしながら探して歩く勉。

66 発車する汽笛と蒸気

67 陸橋

志都、駅の方をじっと見ている。

汽車、次第に近づいて来る。

白煙を静かに受けて見送る志都。

68 テレビ(暗い居間)

工業用地。

夜景。

アナウンス 日本一の家畜市場を持ち、工業用地の干拓によって、生れ変わろうとしている
尾道……しかし、旅行く人々にとってはいっしょに変らぬ、葦と露地と石段の街である。あ
る旅人は詩っている。

涙をためて見ている志都。

アナウンス　いつも悲しく夜すぎる町、あの島、この島、小高い丘の上まで、点々と灯が連なっている。あのうるむ灯の中に、失われた人間の夢と幸福がある。いつか私は、身軽な旅人の姿で、ここに降り立とう、いつか、きつと……すぎゆく尾道の灯よ、その日まで……。

志都、そつと眼頭をふいて、部屋一杯に敷かれた子供達の蒲団の肩口をそつと押えてやる。(先妻の残していった子供たちの)

(終)